

新しい文化財が仲間入り～令和6年度国指定等文化財～

文化財課

令和6年度国指定等文化財

令和6年度は、国の文化財として、「岩川の弥五郎人形行事」が国の文化審議会から文部科学大臣へ答申されたほか、新たに「与論城跡」が史跡に指定されるなどしましたので紹介します。

重要無形民俗文化財（令和7年1月答申）

岩川の弥五郎人形行事（曾於市）

南九州地方には、弥五郎の名称をもつ巨大な人形を作り、神幸行事の先払いとして曳き回す行事が特徴的に分布しています。

本件は、そのような南九州地方における大人形の出る行事の典型的な伝承例であり、また、弥五郎と呼ばれる大人形の形態やその伝承には、同地方に顕著な大人伝説との関わりも窺われ、地域的な特色も豊かです。

岩川の弥五郎人形行事は、曾於市大隅町の岩川八幡神社の秋季例祭に行われる行事で、弥五郎人形が神幸行列の先頭について町内を練り歩き、五穀豊穡を祈願します。弥五郎は、古代の隼人伝説に登場する武人姿の巨大な人形で、浜下りと称する神幸行列の先払い役として祭りに登場します。弥五郎人形は、台車に載せて地区の男児たちが引き、岩川の市街地を巡行します。



【浜下りの行列】

(写真提供：曾於市教育委員会)

【弥五郎人形】

記念物（史跡2件）

与論城跡（与論町・新指定）

与論城跡は、14世紀前半～中頃に築造された大型の琉球式グスク跡で、「琉球式グスク」が確認されている地域の最も北端にあります。

発掘調査の結果、沖縄でグスクの整備が始まる14世紀後半～中頃に造成と石垣の構築が始まり、沖縄本島で明との交易が活発化した時代から尚巴志による三山統一が行われる14世紀後半～15世紀中頃に、現在の城域が整備されたと考えられます。そして、琉球王国の勢力が拡大していく15世紀後半～16世紀に、城としての機能が急激に低下し、薩摩による琉球侵攻が行われる17世紀頃までには城としての機能を失ったと考えられます。

与論城跡は、境界領域の城郭として、明、琉球、奄美、薩摩などによる、東シナ海域の歴史的な状況の変化に連動し、築城され、変遷を遂げた城郭であったと言え、当時の南方社会の実態を知る上で重要です。



【与論城跡（およそ白線の範囲）】

(写真提供：与論町教育委員会)

塚崎古墳群（肝付町・追加指定）

塚崎古墳群は、志布志湾沿岸にある、古墳時代前期後葉頃から中期中葉まで営まれた古墳群です。古墳文化の南限として重要です。日本本土最南端の前方後円墳である51号墳や、南部九州独特の墓制である地下式横穴墓がある可能性のある地区について、文化財指定地に追加されました。